

1. 評価結果概要表

作成日 2008年9月26日

【評価実施概要】

事業所番号	4270202742		
法人名	医療法人 親徳会		
事業所名	グループホーム なごやか		
所在地 (電話番号)	長崎県佐世保市藤原町12-19 (電話) 0956-20-1168		
評価機関名	SEO (株)福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市博多区博多駅南4-2-10 南近代ビル5F		
訪問調査日	平成 20年 4月 16日	評価確定日	平成20年10月4日

【情報提供票より】(平成19年12月12日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 17年 6月 1日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	7/6 人	常勤 5/6人, 非常勤 2/0人, 常勤換算 6.5/6人	

(2) 建物概要

建物形態	単独	新築
建物構造	鉄筋コンクリート造り	
	5 階建ての	3 階 ~ 4 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	30,000 円	その他の経費(月額)	6,000 円
敷 金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり	1,000 円	

(4) 利用者の概要

利用者人数	17 名	男性	8 名	女性	9 名
要介護1	5 名	要介護2	6 名		
要介護3	5 名	要介護4	1 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 76.8 歳	最低 65 歳	最高 102 歳		

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	福田外科医院、山本歯科医院
---------	---------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

古い町並みを通り抜けた場所に“この地域に暮らす住民と共に歩んでいけたら”という、理事長の思いで建てられた。ホーム傍には防空壕があり、現在は漬物等の食料貯蔵庫としての利用を考えている。ご利用者も職員も本音で話して、その場の雰囲気気まづくなる事も時にはあるが、お互いを“家族”と思って暮らせているからだ施設長は嬉しく思っている。一方のユニットは管理者・職員の交代があつているが、ご利用者の表情は明るく豊かで職員のケアが充実している事が伺える。ご利用者に褥創ができた時に、施設長はじめ職員間で勉強会を開き体交まくらを作ったり、職員の家にエアマットを持って来て使用したり、医師から助言を頂きながらケアし褥創が完治した。医師から褒められた事で職員の自信につながり、更にケアに関する事を含めた知識や技術の習得に意欲的になり、一律にオムツを使用するのではなく、その方の状態に合わせて選択する等ご利用者が快適に暮らせるように取り組んでいる。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目 ①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>①ご利用者の力が発揮出来るよう、職員と一緒に体調に合わせてできることをして頂いている②ご利用者お一人ひとりの状況に合わせて口腔ケアの実施や、市職員からの助言を頂きながら感染症対策に取り組んでいる③注意を要する物品はご利用者の目に届かないよう保管場所にドアを取り付けた④ご利用者の思いや生活スタイルで居室ドアを開けている方もおられ、思いのまま過ぎて頂けるよう配慮している⑤食卓にウェットティッシュを準備して、食べこぼし等もご自身で対処できるように見守っている</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>① 全職員が分担して自己評価に取り組み、施設長・チーフが話し合いながら1つにまとめた。職員は自己評価に取り組む中で現状の振り返りが出来き、地域密着についてや取り組みなければならない課題、自分達でできる事に気付き、意識付けにもなっている。管理者は自己評価での気付きを、今後のケアに活かし“一人ひとりに合わせた支援をする事”について、改めて考えるよう職員に伝えている。</p>
重点項目 ②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>施設長は運営推進会議の開催について検討中であるが、会議の参加者等が決定しておらず開催に至っていない。施設長は市へ伺った際にホームの考え方や活動等の情報を提供し、市職員に見学に来て頂いている。感染症の流行時期に情報を頂いたり助言を頂いており、今後、運営推進会議についての相談等も行っていきたいと考えている。</p>
重点項目 ③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>ご家族の来訪時に暮らしぶり・健康状態等、個々に合わせての報告や必要に応じた報告をし、ご家族を動揺させない為に職員の異動は、敢えてお知らせしないようにしている。新規職員はご利用者・ご家族に早く覚えて頂けるよう努力をしている。ご意見箱を設置し、ご意見を書いて頂けるよう無記名のアンケート用紙を用意している。ご家族の来訪時は「何かあったら言ってください」と声をかけ、ご意見・苦情を頂いた場合は専用の書式に記録し、回覧する事で職員間で情報を共有するようにしている。</p>
重点項目 ④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>系列事業所と合同の夏祭りやホームの餅つきに地域の方々に来て頂いたり、敬老会に小学校の児童が手紙を持って慰問に来られたり、ご利用者家族の冠婚葬祭に施設長が出席している。職員の子供が学校で作った作品を見せに来たり、ご利用者と一緒に話をしたり、ご利用者の友人が遊びに来られる事も多い。ご家族が系列サービスを利用されている「何か手伝う事があれば…」とパート勤務をして頂くことになった。地域の一人として寄り合いや地域清掃には職員が参加しているが、ご利用者が参加する機会はないが、今後、参加できる機会を作る予定である。</p>

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	地域で永年診療されている理事長は、訪問診療を行う中で「家族のように暮らし美味しく食べて、その人らしくして欲しい」という、思いを込められて作られた「医食同源、地域密着、自立して退去する」という法人理念を、開設時の職員の同意も得てホームの理念とした。生きて来られた過程、今までの生活がそれぞれ一人ずつ違うと考えH.19に法人理念を基に、各ユニットが「高齢者のペースに合わせて、あなたらしい生活を支援します」とケア目標を定めている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	ご利用者のペースで生活して頂く事が理念に沿ったケアにつながると考えているが、管理者は全職員が理念の深い意味を理解していないのではという思いがある。介助の必要度から声かけ・寄り添い・支援しているが、ご利用者の立場から見た時に公平であるか、幸せなのかとミーティング時に施設長が職員に問いかけたり、管理者が「その人らしさ」に結びつくように話し、少しずつケアにつながってきた。職員毎に理念の理解の違いはあるが、今後も理念を見つめ直し拠り所となるよう検討を続けていく。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	系列事業所と合同の夏祭りやホームの餅つきに地域の方々に来て頂いたり、敬老会に小学校の児童が手紙を持って来られたり、ご利用者家族の冠婚葬祭に施設長が出席している。ご利用者の友人が遊びに来られたり、職員の子どもが学校で作った作品を持って遊びに来てご利用者と話している。系列サービスを利用されているご家族が「何か手伝う事があれば・・・」と、パート勤務をされている。地域の一員として寄り合いや地域清掃には職員が参加しているが、ご利用者が参加する機会はない。	○	公民館長や民生委員の会合に施設長が参加し、ホームの事や認知症について説明の予定があり、ホームを実際に見学してより深く知って頂きたいと考えて、町内や他の地域の役員の方にホームのパンフレットをお渡しする予定である。ご利用者が地域で暮らし続けるための基盤として、地域の方がいつでも立ち寄れる場所となり、地域との付き合いが更に広がっていくことが望まれる。ような取組みに期待していきたい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	施設長は評価に積極的に取り組み、管理者は職員に自己評価について説明をした。項目毎に職員が分担し話し合って記入し全員で確認した後、施設長・チーフが話し合いながら1つにまとめた。職員は自己評価に取り組む中で現状の振り返りができ、地域密着についてや取組まなければならない課題、自分達でできる事に気付き、意識付けにもなっている。管理者は自己評価での気付きを、今後のケアに活かし「一人ひとりに合わせた支援をする事」について、改めて考えるよう職員に伝えている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設長は運営推進会議の開催について検討中であるが、会議の参加者等が決定しておらず開催に至っていない。	○	施設長・チーフは運営推進会議の参加者について、町内会長・民生委員に相談しながら、会議の開催に向けて取り組みたいと考えられている。ご利用者・ご家族・地域の方に会議の参加をお願いしたり、参加者のご意見・ご要望が反映されるような会議になっていく事に期待していきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	施設長が介護保険の手続きに市へ伺った際に、ホームの考え方や活動について情報提供したり、市町村職員がホーム近くに来られた時に見学に寄って頂いている。ノロウイルス等の感染症の流行時期に情報を頂いたり、助言を頂きホーム内で実践している。今後(、)運営推進会議についての相談等も行っていきたい。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	ご家族来訪時や支払に来られた時に、ご利用者の暮らしぶりや受診結果を個々に合わせて細かくお伝えし、何かある時や突発的な事は必要に応じて電話で報告している。事務所で金銭管理をおこなっており、ご利用者毎の金銭出納帳のコピーと領収書をお渡ししたり、請求書と一緒に送るだけでなく、記載し終わった前年度分は全てご家族にお返ししている。ご家族を動揺させない為に職員の異動は、敢えてお知らせしないようにし、新規職員はご利用者・ご家族に早く自分をわかって頂くために努力している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	1階玄関にご意見箱を設置し、食事等についてご意見を書いて頂けるよう、無記名のアンケート用紙を用意しているが、特にご意見を頂いた事はない。ご家族の来訪時は「何かあったら言ってください」と声をかけ、人居時に行政の相談窓口にご意見・苦情を言って頂けるようになっている事を説明し、必要に応じて再度、相談窓口についてお伝えしている。ご意見・苦情を頂いた場合は専用の書式に記録し、閲覧する事で職員間で情報を共有するようにしている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	施設長は顔馴染みの職員がご利用者と関われるよう、基本的に異動は行わない事になっている。休みの希望には極力応じ、施設長・ケアマネジャーが個人面談を行い、職員の悩みを聴いて解決できるようにし、食事会等、職員親睦の場を設けストレス解消に努めている。新規職員に管理者が情報提供・指導を行い、リーダーがご利用者の対応を中心にポイントを伝えている。食事作り等の業務を一緒にを行い、徐々に身体介護が行えるよう指導しながらできる限り、従来と変わらないケアが行えるようにしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護技術や知識が不十分だったため、必要なケアが行えていないのではという思いがあり、ユニット毎や合同ミーティングを毎月行っている。施設長・ケアマネジャーが担当して認知症や、口腔ケア・オムツ交換等のケア技術について内部研修を行っている。自治体・事業者主催の外部研修に施設長・チーフ・ケアマネジャーや、必要に応じて職員も参加し伝達講習を行い情報共有している。職員個々の長所を活かし、適正等も考え研修に参加できるようにしているが、各職員の育成計画の作成までには至っていない。	○	施設長・事務長・管理者・ケアマネジャーと話し合いながら、新人教育システムを検討中である。各職員の立場・経験・習熟度に応じて段階的に力をつけていけるよう、職員毎の育成計画を作成される事に期待していきたい。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設長は同業者との交流・連携の必要性を認識しているが、ご家族や地域との関わりを重点的に行っており、同業者との交流・連携作りに積極的に取り組んでいるとはいえない。グループホーム連絡協議会の研修会・事例検討・職員親睦会にチーフ・ケアマネジャーや職員が参加したり、相互訪問等を通じサービスの質の向上につながるような情報を得ている段階である。今後、研修等を通して交流・連携作りをしていきたいと考えている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用開始前に施設長とケアマネジャーがご自宅や病院を訪問したり、ご本人・ご家族が在宅のケアマネジャーと一緒に見学に来られたり、体験入居して頂き顔馴染みの関係を作っている。入居後はご家族と電話で話されたり訪問を頻繁にして頂いたり、友人がお花を持って訪ねて来られ、徐々に馴染みながら生活して頂けるようにしている。体験入居をされたことで逆にご利用者が不安を抱かれたため、系列のデイサービスを利用して頂きながら、ホーム職員が事業所を訪問したり、ご利用者にホームに来て頂いて馴染んで頂き、ご本人が安心・納得した上で入居して頂いた方もおられる。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員の表情を見て「何かあったでしょう、しっかりしなさいよ」と、ご自分の昔話をされて職員を気づかい励まされ、ゆったりとした気分になっている。介助する時にいつも「ありがとう」と言われる方が「老いてできなくなって初めて感謝の心が生まれる」と、年齢を重ねていく事についての教養を頂いている。戦中・戦後の激動の時代を生きてこられた経験を話して頂き、職員は自分の子育てや生活の参考にさせて頂いたり、疑似家族という思いも強く、スキンシップを細目に行いご利用者と喜怒哀楽を共にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お一人ひとりの思いやご希望等をご利用者・ご家族からお聞きし、一つ一つの生活行為についてどうしたいと思っているのか、全ご利用者の意向を把握できている。明確に意向を表明されない方の思いに近づく為に、ご利用者の行動・表情から思いを汲み取ったり、生活歴・生活習慣・趣味等を出来る限り把握し、行動・表情の背景を推察している。ふとしたご利用者の行動や表情から“誰かに側に居て欲しい”と感じる時は、職員がそっと寄り添っている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	一部センター方式を活用してアセスメントし、お一人ひとりの状況や好み等を踏まえて計画を作成している。ご利用者の“できる・できない”が焦点となり、課題・目標が介護者の視点になっていたり、『地域で暮らす』という視点は殆どの方に盛り込まれておらず、現在行われているケアはポイントだけが記載されている。計画作成にあたり職員はケアカンファレンスで活発に意見を出しているが、家族は「おまかせします」と言われる事も多く、ご家族のご意見・気付きが反映されているとは言い難い。	○	『ご利用者自身の計画』であるという視点に立ち、ご利用者一人ひとりの思い等を踏まえて『その人らしく暮らし続ける』為の、個別・具体的な課題・目標や『地域で暮らす』という視点を、全ご利用者の計画に盛り込まれる事が望まれる。現在行われているケアを手順書等で具体的に記載する事で、全職員のケアの方法・留意点が統一でき、ご家族にご利用者の状況が細かく伝わり、率直なご意見も頂きやすくなると考えられ、今後の取組みに期待していきたい。
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	3ヶ月毎に介護計画の見直しを行い、ご利用者・ご家族の状態・要望に変化が生じた場合や、新たな気付き・意見が出された場合も臨機応変に見直している。毎月のケアカンファレンスで全ご利用者について、変化の兆しについての気付きやケアの変更の必要性等を検討している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	看護職員が日常の健康管理を行い異常の早期発見に努めており、協力医療機関の医師に往診して頂いたり連携体制は整えられている。行きつけの理・美容室に行ったり、ホームで牧師さんにお祈りして頂いたり、外泊時に薬や介助時の注意事項を書いてお渡ししている。独居の方に行事の弁当をお持ちしたり、体調不良時に看護職員が自宅を訪問して様子を見たり、台風の時の安否確認や「何かあればいつでも言ってください」とお伝えし、地域の方も留守にされる時はホームに声をかけて外出されている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時にご希望の医療機関をお聞きし、納得と同意の上で協力医療機関や、以前からのかかりつけ医で受診されている。施設長・職員が介護記録をお見せしながら説明し今後の方針について考えて頂き、心療内科・神経科等の専門医受診を勧めている。職員が通院介助を行っているが確定診断・検査時等の総合病院受診時は、ご家族にお願いし結果をお聞きしている。定期受診結果はご家族の来訪時にお伝えし、何か変化がある場合や急変時の受診については速やかに報告している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	終末期に向けた方針の説明を昨年に行い、ご利用者・ご家族のご意向を把握しているが、一方のユニットではまだ把握できていない方もおられる。急変時や医師と連絡が取れない場合の対応についてや、ホームで対応できる範囲について医師・職員・関係者を交えて話し合っている。ご利用者の状態悪化の時に「寝たきりにさせてしまった」という職員の思いと、ご家族の「ここから出たくない？」という家族の思いを基に、施設長・職員で話し合い「やれるだけやってみよう」と、終末期ケアに取り組んでいる。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	ご利用者を苗字でお呼びしているが、ご利用者によってはお名前でお呼びしたり、丁寧語や普段使いの言葉、方言や時には英語で話しかけが必要な事もあるが、目上の方に対する尊敬の念を持って接している。排泄介助等は「お部屋に行きましょうか」と小声で声かけしたり、手をつないで「一緒に行きましょう」と誘導している。職員は個人情報保護法を理解しており、個人情報が書かれたメモ類は破って捨て、個人情報に触れる話は事務所以外では行わない等、情報の漏洩防止も徹底している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご利用者が外を眺められている時に「今日は天気がいいですね、何をされますか？」とお聞きしたり、ソワソワされている時に「今日はこういう風にしようと思っているのですが」と声を掛けている。帰宅や買い物等のご希望がある時はご家族と相談したり、その時の気分に寄り添って対応している。ご希望を表わされない時は生活リズムが取れるような声かけや、日光浴・散歩をお誘いしているが無理強いはず、ご本人がされる事を見守りながらその日の気分や体調を尊重している。	○	「このように過ごしたい」というご希望を表出されず、何もせずに寝たきりや座りっぱなしになりがちの方の好みを活かして、ニワトリを飼い関わる事で外に出て頂こうと、管理者などは考えている。動物と日々関わる事で戸外に出る機会が確保でき、ご本人の喜びや生きがいにつながっていく事も考えられる。今後の取り組みに期待していきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	皮むき等の調理の下ごしらえや味見をして頂いたり、盛り付けや食器の配膳・下膳、食器洗い・食器拭き・テーブル拭き等、ご利用者ができることをして頂くことで達成感を味わえるよう、さり気なくお手伝いをしている。早朝ご利用者と施設長が旬の食材を買いにタクシーで朝市や道の駅に行っている。誕生日や行事の時に外食をしたり刺身の出前や、おし寿司・具雑煮等の郷土食を採り入れ、ご利用者の相性によって食事時間を少しずらしたり、座る場所に配慮し美味しい物を食べる工夫をしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴の時間帯・回数ある程度決めてはいるが、希望により毎日の入浴も可能で入りたい時に入ってもらい、入る順番やシャンプー・石鹸類・入浴剤、体調に無理のない範囲で入浴時間や湯温等、ご利用者の好みに合わせて対応している。羞恥心・負担感等に配慮して1人ずつ入ってもらい、危険がない場合は職員も浴室から出て様子を伺ったりしている。入浴を嫌がられる時は「ゆっくり好きなように入っていていいですから」と声をかけている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	炊事・洗濯・掃除やゴミ捨て、裁縫・雑巾縫い・繕い物やお茶を注いで頂いたり、写経や水彩画を描いたり書道教室を開かれている。職員と一緒に誕生会のフロアーの飾りつけをされる等、ご本人の「できる事、やりたい事」を探しだしているが、時間がかかる時に職員が手を出し過ぎてしまう事があり、お互いに注意しあっている。他ご利用者の手引き歩行や髪・背中を洗うの手伝われり、生活歴・趣味・習慣を活かせる個別の役割・楽しみを持って頂けるような関わりが、最近できるようになってきている。	○	ご利用者の行動を観察・記録し日常と比較したり、ご本人の活力を引き出すための支援・過剰支援等の状況について、経験を積み重ねながら判断し、必要な支援を見極める力をつけていられる事を望みたい。職員の感性を磨いていく事が、ご利用者の変化にいち早く気づく事にもつながり、ご利用者自身が役割・楽しみ事を見つけられるような働きかけとなる。ご利用者が秘めている力を発揮し、張り合いや喜びのある日々を過ごせるような支援の取り組みに期待していきたい。
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	入居前から行かれていた馴染みの公園まで散歩したり、行きつけの美容室、近くの薬局やおやつを買いに行かれたり、ご家族とケーキを食べに出かけられる事や、チーフと一緒に近くの居酒屋に行って雰囲気味わって頂いている。雨の日は階段の昇り降りにお誘いしたり、気分転換や五感刺激の機会として花壇の水やり等、外気に触れて頂く機会を作っている。職員体制も整ってきており出来るだけ、ご利用者のご希望に添って対応できるようになった。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	ホーム建物の玄関は21:00～6:30迄は防犯上の施錠を行い、一方のユニットは以前、職員が少ない時期に施錠していたが今はユニット玄関に鈴をつけ、夜間以外はエレベーター等も自由に使えるようにしている。必要に応じて1対1での対応が可能になるよう、その都度勤務体制を変更している。他方のユニットでは開錠したいとの思いはあるが通常は施錠し、ご利用者毎の落ち着かなくなる時間帯・傾向等を把握し、職員体制に余裕がある時間帯だけ開錠しており、今後も現状維持する。	○	ご利用者の状況や職員の人員体制を整えながら、鍵をかけないケアに取り組んでいるが、今後も、少しずつでもご利用者・ご家族・職員と話し合いを続け、鍵を閉めている時間を少しでも短くされていくような、取り組みを続けていられることを望みたい。
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	全職員・ご利用者と消防署職員を交えてH.18.12に、火災を想定して消防・避難訓練を行っており、隣近所の住民や交番に非常災害時の協力依頼をしている。グループホームの特性をお伝え、職員がご利用者を戸外へ避難させた後に、ご利用者の見守りをして頂くようにしている。災害に備えて食料・飲料水等の備品は特に準備されていない。	○	火災や夜間の災害発生に備え実践的な訓練を、定期的に行う事で災害時に冷静沈着な行動につながると考えられる。日頃から避難経路やご利用者毎の避難誘導の方法等を、職員が把握しておかれる事が望まれる。災害発生時に備えて食料や飲料水、寒さをしのぐ為の物等の物品についても、必要物品や必要量等を職員と共に検討される事に期待していきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ご利用者の好みに合わせて食材や調理方法・味付け・盛り付けを変え、水分摂取量が少ない時は、飲み物の種類を選べるようにしている。医食同源の理念に基づきインスタントの物は使用せず‘だし’は鰹節や昆布から取り、冷蔵庫内にある食材を使って献立が重ならないよう調理している。定期的な体重測定・血液検査の結果に基づき、医師から食事・運動について助言を得ている。経口摂取が減少している方は毎朝医師に報告し、指示により点滴等に対応している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関ポーチやユニット毎の玄関に季節の花が飾られ、皆が集まるホールにご利用者手作りの季節の貼り絵や、ご利用者が描かれた絵、和風の小物や懐かしい南部鉄瓶等が飾られている。家具や備品等は全体的に明るい色合いでまとめられているが、落ち着いた感じで窓際に畳が敷かれ、日光浴を楽しみながらおやつを食べたり、時にはお茶を点てたり、洗濯物をたたむ等して頂いている。テレビは状況に応じて消したり、ブラインドで光の量を調節し季節に応じて、窓を開ける時間や回数を変え空気の流れ等に配慮している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッド、タンスは備え付けになっており、ご本人・ご家族が相談して使い慣れた寝具、テーブル、イス、パイプハンガー、衣装ケース等を持ってきて頂いている。ご家族の写真やテレビ、冷蔵庫等を置き出来るだけご自宅に近い環境を整え、ご本人に居心地よく過ごして頂けるように工夫している。		